

Contents.	p.1 センター長挨拶	p.3 センタースタッフ紹介	p.5 プロジェクト紹介
	p.9 研究イベント	p.12 実践レポート	p.21 トピックス

センター長挨拶

創刊に寄せてー強みをチカラに、才能を未来にー

愛媛大学教育学部附属才能教育センター長 隅田 学



このたび、愛媛大学教育学部附属才能教育センター（EU-GATE: Centre for Gifted Education and Talent Development）のニュースレター創刊号をお届けできることを、大変うれしく思います。日頃より本センターの活動にご理解とご支援を賜っている皆様に、心より御礼申し上げます。

EU-GATEは、2025年4月1日、我が国で初めて「才能教育」を冠する大学附属センターとして設立されました。才能のある子供は、年齢や性別、地域を問わず、私たちの身近にいます。もう20年以上前、私が初めて面談した小学2年生の子供は、「ニュートリノ」について私に熱心に説明してくれました。免疫細胞について整理ながらオリジナルの新しい細胞を提案する小学1年生、坂本龍馬が大好きでフィールド調査を行う小学3年生、複数の言語を独学で学びインターネット動画プラットフォームを開設する小学2年生など、その姿は実に多様です。一方で、優れた力が十分に理解されず、周囲との違いに戸惑ったり、学習上・生活上の困難を抱えたりすることもあります。才能と障害や困難を併せ有する2E（twice-exceptional）の子供を含め、一人一人の「強み」を見だし、適切な学びと支援につなぐことは、多様性を包摂するこれからの教育にとって重要な課題です。

世界に目を向けると、才能教育は、限ら

れた子供を選抜するための教育から、多様な背景をもつ子供の可能性を公平に見だし、継続的な才能発達を支える教育へと、その重点を広げています。世界才能教育学会（WCGTC）は、全ての教員が才能のある子供と関わることを前提に、役割に応じた段階的で、根拠に基づき、子供の学問的・社会的・情緒的側面を総合して捉える教員研修の必要性を示しています。また、米国の全米才能教育学会（NAGC）は2026年の声明において、通常学級の教員、管理職、カウンセラー、心理職等を含む全ての教育関係者が才能教育について学ぶ「普遍的な教員養成」を提唱しました。さらに、学年相当の内容だけでは十分な挑戦にならない子供に対し、学習の速度、深さ、複雑さを調整し、拡充や早修、カリキュラム・コンパクティング、メンタリング、課題・探究型学習等を組み合わせることは、選択肢ではなく必要な教育的対応であると強調されています。

アジア太平洋地域においても、才能教育は大きく発展しています。アジア太平洋才能教育学会（APFG）が2024年に刊行した「Gifted Education Guidelines」は、才能の捉え方に加え、創造性、社会経済的・文化的に不利な状況にある才能児、保護者支援、STEM教育、2E、ウェルビーイング、進路選択とキャリア発達までを扱っています。そこには、能力の高さだけでなく、子供を取り巻く文化、家庭、学校、社会との関係

の中で才能伸長を支えるという、今日の国際的な方向性が表れています。こうした動向は、才能教育が学力の向上だけを目的とするものではなく、本人の幸福、社会的包摂、創造性の発揮、そして地域や世界の課題解決に関わる営みであることを示しています。

本センターは、「強みを、チカラに。才能を、未来に。」を掲げ、教育実践と理論研究の両面から、子供たちの可能性を社会の未来へつなぐことを目指しています。教育学部の多様な専門分野、附属幼稚園・小学校・中学校・高等学校・特別支援学校の実践知、国内外の研究者・実践者とのネットワークを生かし、学校の授業内、学校内の組織的支援、学校外の高度で多様な学びを相互につなぐ取組を進めています。特に、才能教育を特定の担当者だけに委ねるのではなく、学級担任、教科担当、管理職、養護・特別支援・心理等の専門職、保護者、大学や地域の専門家が、それぞれの立場から子供を支える仕組みを構築することを重視しています。

設立初年度には、「キッズアカデミア」や「ギフテッド・アカデミア」の継続的な展開に加え、文部科学省事業による学校と連携した学習・支援プログラムの実証研究、全国から寄せられる相談に対応する支援体制の整備、研究メンタリング、教員研修、啓発活動などに取り組みました。また、お茶の水女子大学サイエンス＆エデュケーション研究所との連携協定を締結し、東京と愛媛で開催した「Gifted × Japan」には、研究者、教員、教育行政関係者、保護者、学生など、多くの皆様にご参加いただきました。国内外の客員教授・研究者との協働も進み、愛媛に根を張りながら、日本とアジア太平洋、そして世界を結ぶ拠点としての歩みを始めています。

その重要な基盤となったのが、2024年8月に香川県高松市で日本初開催した第18回アジア太平洋ギフテッド教育研究大会（APCG2024）です。26カ国・地域から420人が集い、学術交流に加えて、地域の学校や文化・自然資源と結び付いた多彩なプログラムを展開しました。この大会は、日本政府観光局（JNTO）2025年度「国際会

議誘致・開催貢献賞」国際会議開催の部（中小規模会議部門）を受賞しました。クラウドファンディングによる運営支援、学校視察や地域体験、災害リスクへの迅速な対応に加え、大会開催が愛媛大学における才能教育の新たな拠点形成につながったことも評価されました。この受賞は、多くの関係者と地域の皆様が力を合わせて築いた成果であると同時に、国際会議の知見を一過性のものとせず、教育・研究・社会実装へとつなぐ本センターの使命を改めて示すものです。

創刊号では、センターを支える多彩なメンバー、主要なプロジェクト、研究イベント、学校や地域における実践など、設立からこれまでの歩みをご紹介します。才能教育は、一部の特別な子供だけのためのものではありません。子供の興味や強みを丁寧に捉え、ふさわしい挑戦の機会を用意することは、学級や学校全体の学びを豊かにし、全ての子供が自分らしく成長できる教育につながります。本ニュースレターが、才能のある子供たちへの理解を広げ、学校、家庭、大学、地域、行政、民間団体を結ぶ対話と協働のきっかけとなることを願っています。

EU-GATEは、まだ始まったばかりです。だからこそ、海外の知見をそのまま導入するのではなく、現場の声や子供たちの姿から学び、研究と実践を往還しながら、我が国の文化と教育制度に根差した才能教育を皆様と共につくっていきたいと考えています。一人一人の可能性が見いだされ、強みが育まれ、その力が本人の幸福と社会のよりよい未来につながるよう、愛媛から新たな才能教育の扉をひらいてまいります。今後とも、皆様の温かいご理解、ご支援、ご協力を賜りますよう、お願い申し上げます。

センタースタッフ紹介

○センターメンバー



隅田学
(センター長・教授)
特異な才能のある児童生徒の理解と支援が学校と社会に広がるよう尽力します。



中野広輔
(副センター長・教授)
特別支援医学の視点から才能教育研究を行います。



井上昌善
(准教授)
社会科教育の視点から才能教育研究を行います。



苅田知則
(准教授)
特別支援心理学の視点から才能教育研究を行います。



清田朗裕
(准教授)
国語科教育・言語学の視点から才能教育研究を行います。



真鍋昌嗣
(教授)
教育実践学の視点から才能教育研究を行います。



立松大祐
(教授)
英語科教育の視点から才能教育研究を行います。



田中雅人
(教授)
スポーツ教育学の視点から才能教育研究を行います。



玉井輝之
(准教授)
技術科教育の視点から才能教育研究を行います。



向平和
(教授)
理科教育・生物教育の視点から才能教育研究を行います。



吉村直道
(教授)
数学教育の視点から才能教育研究を行います。



宮本春奈
附属小学校(教諭)
幼稚園・小学校をフィールドとして才能教育研究を行います。



玉井淳博
附属小学校(教諭)
小学校をフィールドとして才能教育研究を行います。



仙波弘行
附属中学校(教諭)
中学校をフィールドとして才能教育研究を行います。



川本孝
附属特別支援学校(副校長)
特別支援学校をフィールドとして才能教育研究を行います。



横山泰士
附属高等学校(教諭)
高校をフィールドとして才能教育研究を行います。



大山くらら
附属高等学校(教諭)
高校をフィールドとして才能教育研究を行います。



大西裕里
(研究補助員)
皆さんの才能教育研究を補助します。



武市弘通
(研究補助員)
皆さんの才能教育研究を補助します。

○客員教授・准教授



松村暢隆
関西大学
(名誉教授)



Julia Link Roberts
Mahurin Professor,
Western Kentucky
University



Rena Subotnik
Academic Talent
Development Program,
University of California
Berkeley



石川裕之
京都女子大学
高等教育開発センター
(教授)



Heidrun Stoeger
Chair for School
Pedagogy,
Universität Regensburg



Kimberley L. Chandler
Director of Curriculum,
Center for Talented
Youth, Johns Hopkins
University



角谷詩織
上越教育大学
(教授)



Jae Yup Jared
Jung
Professor,
The University of New
South Wales



Jiyoung Ryu
Director,
Gifted Policy Center,
KAIST Global Institute
For Talented Education



Erkki Tapio Lassila
神戸大学
人間発達学研究科
(准教授)

○特定研究員



Sanjita Prasad
(愛媛大学教育学部附属
才能教育センター)



森本久美
(愛媛大学教育学部附属
才能教育センター)

○客員研究員



新井しのぶ
中村学園大学
教育学部
(准教授)



吉川あすか
小郡市立三国小学校
(教諭)



Antonnette Pawilen
(愛媛大学大学院
地域レジリエンス学環)

Kids Academia

報告：愛媛大学教育学部附属才能教育センター 研究補助員 大西裕里

1. プロジェクト概要

Kids Academiaは、高度な知的能力、創造的能力や高い知的欲求を示している子供、特定の分野に長けている子供の個性や能力を見だし、伸張する学習プログラムを開発・実践するために、2010年にスタートした。すべての子供が個性を伸ばし、挑戦する心を育むために様々な教育支援活動を行っている。2021年には、オンラインプログラムを始め、国内外の子供、保護者、教育関係者、研究者、才能教育に関心のある方々によるプラットフォームとなるようホームページ(<https://kids-academia.com/>)をリニューアルした。

2. 2025年度の主な活動

2.1. サイエンス講座「サマースクール」

自然や科学、算数・数学、ものづくり等に強い興味を持っている幼稚園年長～小学2年生を対象とし、全4回のオンラインサマースクールを開催した。①「体ってすごい！」というテーマで「アレルギー」について学び、自宅にあるアレルギーを含む食べ物を探して発表しあったり、4コマ漫画に表現したりした。②「水とともだち！」というテーマで開催し、身近な素材を使った水に関する3つの実験を通して、水の物理的特性や密度について学んだ。③「形のふしぎ？」というテーマで、9種類の図形についてその特徴を歌で学んだり、家にある形を探して紹介し合ったり、形を組み合わせる創造的な活動を行ったりした。④「きみも今日からけんきゅうしゃ！！」というテーマで、子供たち自身が取り組んだ研究についての発表会を行った。採取したプラナリアでの実験や浮力の実験をさらに掘り下げたり、熱について変数を制御して実験を行い、結果をグラフで示したりするなど、観察や実験を通して、論理的に考察し、研究成果を発表した。

2.2. サイエンス講座「ウィンタースクール」

算数・数学に強い関心を持つキッズメンバーが多いことから、「算数・数学」に特化した講座(全3回)を開催した。米国W&M大学才能教育センターやコネティカット大学・ノーザンケンタッキー大学・ボストン大学が共同開発し、全米才能教育学会にてカリキュラムアワードを受賞した教材の課題や算数オリンピックの問題に挑戦した。参加者がみんなに解いて欲しいと持ち寄ったチャレンジ問題も解き合い、中には、発案した子供が思いついていなかった新しい答えが他の子に発見される場面もあり、盛り上がった。

2.3. 「キッズメンバー交流会」

キッズメンバーを対象に春と秋に開催した。春には愛媛大学にて対面で開催し、愛媛大学特別名誉教授の入船徹男先生の特別講演や、交流活動としてチーム対抗のマシュマロチャレンジ、保護者座談会も実施した。秋にはオンラインで「防災」をテーマとしたプログラムを実施した。



2.4. 「子供コンテスト」

幼稚園年長～小学2年生を対象とし、年に1度のペースで開催している。2025年度は新学期のことばー幼き詩人たちの俳句コンテスト」と題し、子供たちの瑞々しい感性で捉えた新学期の情景や心情を、五七五の限られた音数の中に自由に表現した。グランプリには早ちゃん(小学2年)の「入学のよくわからないけど うんと言う」が選ばれた。

2.5. 研究メンタリング

キッズメンバーを対象に、自由な発想に富んだ研究を随時募集している。HPを通して申し込まれた研究や、サイエンス講座で発表した研究に対し、メンタリングを行うとともに、HPで紹介している。

Gifted Academia

報告：愛媛大学教育学部附属才能教育センター 研究補助員 大西裕里

1. プロジェクト概要

Gifted Academiaは、才能ある子供たちや才能教育への理解を広げ深めていくことを目的とし、2020年11月にスタートした。教育関係者、保護者、才能教育に関心のある全ての方を対象とし、PeatixのHP (<https://gifted-academia.peatix.com/>)を通して申し込み、月に一度、火曜19:30～20:10にオンライン(zoom)で実施している。

2. テーマ紹介(2025年度)

第63回：日本初！「才能教育センター」が愛媛大学に設置されます！！

第64回：愛媛大学才能教育センター(EU-GATE)・お茶の水女子大学サイエンス & エデュケーション研究所共催イベント「Gifted × Japan:新たな才能教育の扉を開く」in東京

第65回：【報告会】愛媛大学才能教育センター(EU-GATE)・お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーション研究所共催イベント「Gifted × Japan:新たな才能教育の扉を開く」in東京

第66回：World Council for Gifted and Talented Children Conference 2025 報告会

第67回：愛媛大学才能教育センター・イベントを開催します！「Gifted × Japan:才能が育つ社会へ、学校からの挑戦」in愛媛

第68回：今おすすめの一冊！『ギフティッドネス—理解と支援のための基礎・基本』(春秋社)出版記念セミナー 講師：角谷詩織教授(上越教育大学教授・愛媛大学教育学部附属才能教育センター客員教授)

第69回：海外のギフテッド教育事情(9) インド 才能児との30年の歩み—私が学んだこと— 講師：パロミタ・ロイ博士(ジャガディッシュ・ボズ・ナショナル・サイエンス・タレント・サーチ元所長、アジア太平洋才能教育学会理事)

第70回：「学生海外短期派遣プログラム

『教育の革新をデザインできる国際人材の育成：韓国の才能教育から教育多様化の最前線を学ぶ』を立ち上げました！」

第71回：【報告会】愛媛大学才能教育センター(EU-GATE)研究会イベント「Gifted × Japan:才能が育つ社会へ、学校からの挑戦」in愛媛

第72回：ギフテッドな子供をめぐる「伝え方」を考える～子供本人と周囲にどう伝えるか～

第73回：「Gifted(才能児)」向けに工夫された教育プログラムを見てみよう(12)～キッズ・アカデミア～ウィンタースクール2025～

第74回：祝1周年 愛媛大学教育学部附属才能教育センターの2025年度活動報告

3. 成果と今後に向けて

毎回テーマを設定し、国内外の有識者にもゲストスピーカーとしてお越し頂き、才能教育に関する国内外の最新動向を伝えている。2025年度は、才能教育センターのキックオフイベントが東京・愛媛で開催されたことから、EU-GATEに関する紹介や報告が多い年となった。

2026年度は、4月に新たに設立された「日本才能研究学会」初代会長の関西大学名誉教授の松村暢隆先生をお招きし、「特才児への望ましい指導・支援～才能教育の理念の変遷に鑑みて～」と題したミニ講演を行っていただいた。

また5月には、昨年度センターへ寄せられた相談事例の特徴について、EU-GATE特定研究員のサンジタ・プラサドさんによる予備的分析の結果をご紹介頂いた。

才能教育をめぐるっては、近年、社会的関心が高まる一方で、その理念や支援の在り方について丁寧な理解を共有していくことがますます重要になっている。特異な才能のある子供たちへの望ましい指導・支援の在り方について、ともに理解を深める機会となるよう今後も継続する考えである。

プロジェクト紹介

学校と連携した学習・支援プログラムの提供及び

評価の在り方に関する実証研究

1. 研究概要

本研究は、特定分野に特異な才能のある児童生徒の学びと支援を、学校現場で実装可能な支援モデルとして整理することを目的とした。具体的には、附属小学校・附属中学校およびKids Academiaをフィールドに合計9つの実践を行い、それらを9タイプの分類に対応づけて検討した。以下の4フィールドでの実践報告から得られた研究内容を示す。①附属小学校での授業実践、②附属小学校での学年横断の実践、③附属中学校での学校外・地域接続を含む実践、④Kids Academiaの実践

2. 研究内容

2.1. 現状の分析

本計画を実行するメンバーは、令和5年度・6年度文部科学省「特定分野に特異な才能のある児童生徒への支援の推進事業」、「特異な才能のある児童生徒に関する研修パッケージの作成」に参画したメンバーを中心としている。また附属小学校には、愛媛大学「Kids Academia」に登録、附属中学校には、本学が実施するJST事業「ジュニアドクター育成塾」事業に参加している児童生徒も存在する。

近年では附属小中学校に、不登校の児童生徒たちも存在し、彼ら／彼女らの特性や才能を十分に把握できておらず、能力を伸長する方策について手探りの部分もある。

2.2. 研究における取組

<内容> 本事業では、①特異な才能のある児童生徒の見出し方、②特異な才能のある児童生徒の探究的・研究的活動を支える学習・支援プログラムの在り方、③学校外で行われる学習・支援プログラムの学校の教育課程への位置付け方、④学校外で行われる学習・支援プログラムの成果の学校での評価への活かし方、⑤個別教育支援計画や指導計画の作成のあり方について、実証研究を行う。

そして、それを包括的に検討する枠組みとして、右図の教育支援の類型化に関する仮説の枠組みと教育支援の類型化に関する仮説の枠組みを設定し、実証研究に用いる。

	担当教員 a	教員による連携 b	外部専門家等 c
教室内 Type I	Type I a	Type I b	Type I c
学校内 Type II	Type II a	Type II b	Type II c
学校外 Type III	Type III a	Type III b	Type III c

図. 特定分野に特異な才能のある児童生徒を対象とした教育支援の類型化に関する本研究の仮説

<事例> 【TypeⅢ -c】 Kids Academia「2025ウィンタースクール ～「クリスマスMath」の挑戦！～」: 高度な課題に



取り組む機会を提供し、学校の算数授業での困り感や家庭での学びの様子等の情報を含め、学校内だけでは学びが成立しにくい子供がいること、家庭情報を支援設計に接続する必要性を明確化した(TypeⅢ-c)。<成果>「波及」という点では、附属学校園と教育学部の合同研修会等で周知を図りつつ、全国都道府県の教育センター愛媛教育研究大会で本事業フライヤーを配布して成果発信を行い、現場内外の理解促進・関心喚起を進めた。

<課題> 学校現場には不登校等を含む多様な児童生徒が存在し、特性や才能を十分に把握できず、能力を伸長する方策が手探りとなる場合があるという課題が確認された。支援の継続性・組織性を高めるため児童生徒の能力や個性等をプロファイル化して共有し、校内外の支援資源（授業内の工夫、教員連携、大学・外部機関連携等）へ接続する仕組みが不可欠である。

* 研究成果報告書(令和8年3月6日文部科学省へ提出) より

全国単位の相談支援体制の構築等に関する実証研究

1. 研究概要

本事業では、特定分野に特異な才能のある児童生徒とその保護者・学校関係者等からの相談を全国から受け付け、面談・助言・継続支援・メンタリングへつなげる「相談支援体制」を整備し、実際に運用した。令和7年度は主に、①相談支援の運営体制の構築、②相談を受け止めて支援に移すための具体的な仕組みを実装し、運用データと事例を蓄積した。

2. 研究内容

2.1. 相談支援の体制

本学では、既に全国的なネットワークが構築されている。2024年8月にアジア太平洋ギフテッド教育研究大会に集ったメンバーとは、特定分野に特異な才能のある児童生徒への支援に関して既に共通理解ができており、相談支援体制の構築、実証研究へ向けて直ちに始動可能な状況であった。

令和7年4月1日付で、愛媛大学に教育学部附属才能教育センターが設置、さらに、令和7年7月4日、同才能教育センターとお茶の水女子大学サイエンス&エデュケーション研究所が連携協力に関する協定を締結した。

2.2. 取組内容

本事業では、2年間を通じて得られた知見を基にして、才能のある児童生徒への教育支援に関するガイドラインの作成を目指す。

令和7年度は以下の3点を行った。①相談窓口の体制整備、②相談支援のフロー整備と蓄積、③サイバーメンタリングシステムの開発と試行

＜内容＞令和7年度、本事業を通じて全国から相談を受け付け、令和8年3月24日時点で相談対応件数は延べ71件、相談対象の児童生徒等は49名となった。年齢は幼児から高校生等まで幅広く、小学生が最も多い。また、北海道から沖縄まで14都道府県から、保護者に加え、教員や教育委員会等からも相談が寄せられた。相談内容を分析すると、①特定分野への興味・関心や学

習環境、②強みを伸ばす教材・指導方法、③心理・社会面、④認知・行動特性、⑤その他（親子関係・進路等）に大きく類型化できた。これに対する支援も、大きく、a. 本人の特性に合った学びや活動の提案、b. 専門家・仲間とのつながりづくり、c. オンライン等による継続的な学びの支援に整理できた。さらに、教員からの相談を契機に、児童本人・家庭との状況確認、校内での支援方針の検討、試行とフィードバック、大学教員によるオンライン講義等を組み合わせ、学校と長期間にわたり連携しながら組織的・継続的に支援した事例も得られた。

＜評価＞相談の流れの中でフィードバックを得るプロセスが含まれていなかった点は反省点であり、次年度以降、支援利用者からの評価を得られるフローへと改善を行う。

3. 実証研究の成果や課題

＜成果＞令和7年度に相談を受けた結果から、その相談の多くは ①子供の特性について話し合い、その特性に合った関わり方や活動について提案することにより解決する相談、②専門家や仲間とのつながりづくりを提案することにより解決する相談、③オンラインも活動し、専門家から継続的な学びの支援を受けることにより解決する相談、に分けることができた。

＜課題＞「仕組みの改善」と「評価・継続性の確保」のため、以下の4点を課題とした。

①サイバーメンタリングシステムの簡易化と機能性向上、②評価・改善に必要なフィードバック取得の仕組みの導入、③児童生徒の興味に応じたテラーメイド型教材提供プラットフォームの開発・試行の推進、④興味関心・能力を共有する仲間や仲間をサポートしてくれるメンターとつながるプラットフォーム「Mirai Talent Bridge」の開発

* 研究成果報告書（令和8年3月6日文部科学省へ提出）より

研究イベント

「Gifted × Japan : 新たな才能教育の扉を開く」

at Ochanomizu University, Tokyo

報告: 愛媛大学教育学部附属才能教育センター 隅田学・中野広輔

2025年7月5日、お茶の水女子大学において、愛媛大学教育学部附属才能教育センター(EU-GATE)とお茶の水女子大学サイエンス&エデュケーション研究所の共催による記念イベント「Gifted × Japan: 新たな才能教育の扉を開く」が開催された。本イベントは、2025年4月に設立されたEU-GATEの始動、お茶の水女子大学との連携協力協定の締結、さらに同大学創立150周年を記念するものである。2024年8月に日本で初めて開催された第18回アジア太平洋ギフテッド教育研究大会(APCG2024)の成果を、より多くの教育関係者へ日本語で還元する機会としても企画され、全国から100名を超える研究者、教員、教育行政関係者、保護者、学生らが集った。

1. 文部科学省と海外から寄せられた祝意

開会式では、文部科学省初等中等教育局教育課程課の岩岡寛人学校教育官からビデオ祝辞が寄せられた。岩岡氏は、日本初となるEU-GATEの設立と両大学の連携協定締結に祝意を示すとともに、文部科学省が2023年度から進める「特定分野に特異な才能のある児童生徒への支援の推進事業」に触れ、才能のある児童生徒の学習上・生活上の困難を踏まえた支援と、一人一人の特性や関心に応じた学びを充実させることの重要性を述べた。また、大学、学校、教育委員会、民間団体等が知見を共有し、実践を積み重ねる本イベントが、今後の支援の広がりにつながることへの期待が示された。

さらに、アジア太平洋才能教育学会(Asia-Pacific Federation on Giftedness)会長のパク・ギョンビン教授(Gachon University)も来場し、アジア太平洋地域における才能教育の発展と、日本における新たな拠点形成への期待を込めて祝辞を述べた。国内の制度的な動きと

国際的な研究ネットワークが交差する開会式となった。

2. 世界的第一人者から学ぶ才能教育の理念

最初のプログラムでは、コネティカット大学のジョセフ・レンズーリ博士とサリー・リース博士によるレジェンド・トーク「才能教育の歩みを振り返って: 教訓と優れた実践法」が上映された。長年にわたり世界の才能教育を牽引してきた両氏は、スクールワイド・エンリッチメント・モデル(SEM)の発展を振り返り、才能教育を一部の子供を選抜するための教育に限定せず、すべての子供が興味や強みを発見し、本物の課題に取り組む機会を得るための教育として捉えることの大切さを語った。知久麻衣氏(日本SEM協会代表理事)の翻訳により、その理念が分かりやすく共有された。この動画は、レジェンド・トークとして、本センターのHPより視聴できる。

3. 海外の制度と教師教育から日本を捉え直す

「才能教育研究最前線」では、リュ・ジヨン教授(KAIST Gifted Policy Center)が「すべての子供の潜在能力を発掘する—韓国における才能教育の現在地—」と題して講演した。韓国における才能教育制度の歴史、才能児学級や専門学校の展開に加え、社会経済的な事情から才能を発揮しにくい子供を支援するKAIST Science Outreach ProgramやGifted-Up Projectが紹介され、制度化と包摂性を両立させる視点が示された。

続いてエルツキ・タピオ・ラッシラ准教授(神戸大学)は、「才能児の指導に関する個人的かつ文化社会的『壁』」をテーマに、複数国の教員養成課程学生を対象とした研究を紹介した。すべての児童生徒の成長を願う理念が共有される一方、才能ある子供への特別な支援には躊躇や抵抗も生じること、その背景に社会文化的な価値観が関わ

ることが示され、教師教育において才能教育を学ぶ必要性が提起された。

4. 松村暢隆教授(関西大学名誉教授、EU-GATE客員教授)による特別講演

午後には、松村暢隆教授が『「特異な才能のある児童生徒への指導・支援」とは何か?』と題して講演した。松村教授は、ご自身がメンバーを務めた文部科学省有識者会議の議論と「審議のまとめ」をたどりながら、「特異な才能」を単一の基準で一律に定義・評価するのではなく、領域や取組の目的に応じて多様に捉える必要性を説明した。個人を「ギフテッド」とラベル付けするのではなく、教室で子供が夢中になって取り組む姿や、課題への傾倒、創造性などを丁寧に見取る視点も強調された。

また、通常学級を拠点とする個別最適な学びと協働的な学びの中で、全ての子供の才能を生かすインクルーシブな指導・支援を目指すこと、学校内外の学びをつなぐこと、そして才能と発達障害等が併存する2Eの子供については、強みを伸ばすことと困難を軽減することの双方が必要であることが示された。SEMの拡充三つ組モデルも紹介され、「上げ潮ですべての船が浮き上がる」という考え方から、才能ある子供への高度な学びが学級・学校全体の学びを豊かにする可能性が語られた。

5. シンポジウム—我が国の学校教育で支援はできるのか

シンポジウム「我が国の学校教育において特異な才能のある児童生徒への支援はできるのか?」では、角谷詩織教授(上越教育大学)が司会を務め、隅田学教授・才能教育センター長(愛媛大学)、鈴木秀樹教諭(東京学芸大学附属小金井小学校)、藤田由美子氏(株式会社ユーミックス)が登壇した。文部科学省「特定分野に特異な才能のある児童生徒への支援の推進事業」の最前線に関わる三者が、これまでの実証研究や学校現場での試み、学校外の学習機会や社会との接続について報告し、2年間の成果と今後の課題を共有した。

学校等における様々な実践から、才能ある子供は地域や年齢を問わず存在する一方、既存の教育の枠組みだけでは十分に力を発揮できず、困難を抱える場合があるこ

とが紹介された。学校を基盤としながら外部専門家や学校外の学びの場と連携すること、本人の関心と主体性を尊重すること、才能伸長と社会情緒的支援を一体的に考えることなど、日本の学校教育における支援の方向性が多角的に議論された。

6. 二つの実践的ワークショップ

ワークショップ「子供の個性や才能を伸ばす科学観察実験コンテンツ」では、お茶の水女子大学サイエンス & エデュケーション研究所の教員が、立体視、骨伝導、クラドニ図形、地学教材、ICTを活用した教材など、多様な科学観察・実験活動を紹介した。身近な素材や現象から問いを生み、観察、試行、説明へとつなげる活動を参加者自身が体験し、子供の好奇心や得意分野を見いだす教材設計について学んだ。

もう一つのワークショップ「教室で今すぐ実践! 探究を助けるSEMと拡充のアイデア」では、知久麻衣氏がSEMの考え方を基に、子供の興味や「好き」を出発点として学びを深める方法を紹介した。教師が答えを与えるのではなく、子供の問いを受け止め、調査や創作、発表へと発展させる具体的な工夫が共有され、参加者同士の対話を通して実践への理解が深められた。

7. 参加者の声と共感・対話

参加者からは、「海外の第一人者の考えを日本語で学べる貴重な機会だった」「才能教育と包摂を対立するものとして捉える必要がないと分かった」「学校で行ってきた実践に理論的な裏付けがあることを知り、自信につながった」といった感想が寄せられた。ワークショップについても、「子供のワクワクを引き出すには、教育者自身がワクワクすることが大切だと感じた」「すぐに授業で試したい教材や考え方が多かった」など、実践への意欲を示す声が聞かれた。

最後のネットワーキング・イベントでは、研究者、教員、保護者、学生などが立場を越えて交流した。EU-GATEとお茶の水女子大学との連携を起点として、日本語で「才能」と「教育」について深く語り合える一日が実現し、多くの共感や対話が生まれたことは、私たちにとって何よりの喜びであり、参加者の熱気と高揚感に包まれたひとときとなった。

研究イベント

「Gifted × Japan : 才能が育つ社会へ、学校からの挑戦」

at Ehime University Primary School, Faculty of Education

報告：愛媛大学教育学部附属才能教育センター 特定研究員 森本久美

全国的な潮流を国内外へとつなげ、才能を育む未来を構想する試みとして、令和7年10月25日(土)に愛媛大学教育学部附属小学校において、本研究会が開催された。

約100名の研究者・実践者・政策関係者等が集結したイベントの開会式では、隅田学センター長の挨拶に続き、韓国から本イベントの為に来日くださったアン・ドヒ教授(President, The Korean Society for the Gifted)よりご祝辞を賜り、韓国の才能教育の取組で得た学びと本センターの発展を希望として託された。



1. レジェンドトーク(オンライン録画)

世界的に著名な米国のレナ・スポトニック博士による講演「IQを超えて～学校の内外、そしてその枠を超えて児童生徒の才能を育む～」では、米国における才能教育研究の変遷について、歴史的な流れと最近の動向についての話をいただいた。なぜ才能伸長アプローチが必要なのか、特才児に求められる力とはどういうものか等について、今後も拝聴する機会が限られるだけに貴重な講演であった。

2. 才能教育最前線

海外の最新動向の紹介では、石川裕之先生(京都女子大学教授)とジャクリン・ハードマン先生(ニューサウスウェールズ大学大学院)から、それぞれ韓国、タスマニア両国の才能教育の光と影に迫るご講演をいただいた。才能教育スタート時の理念と目的の重要性を共有し、今後の日本の才能教育の方向性や日本の実情に合うプログラムについて考えを深める時間となった。

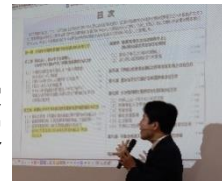
3. 特別講演

午後からは、文部科学省初等中等教育局教育課程企画室の栗山和大室長を迎えて

「特定分野に特異な才能のある児童生徒への支援の充実に向けて～次期学習指導要領に向けた検討状況～」と題した政策的展望についてご講演いただいた。



文部科学省の関連する有識者会議のメンバーであった関西大学名誉教授松村暢隆先生による指定討論も行われ、我が国の歴史的な変革の始まりを直に感じる時間となった。



4. シンポジウム

「学校の学びを広げ、多様化する～特異な才能のある児童生徒が自分らしく生きるために～」と題した、愛媛大学教育学部附属学校教員や長野県教育委員会事務局学びの改革支援課の五味和高先生、中村学園大学新井しのぶ先生によるシンポジウムでは、国内の学校で行われている好事例が紹介された。



ジュニアドクター育成塾受講者で「APCG 2024 Youth Summit」に参加した中学生も自分の経験と才能教育への期待を述べた。

5. ワークショップ

シンガポール教育研究所のレチミー・デーヴィー・ポンヌサーミー先生、神戸大学エルッキ・ラッシラ先生、愛媛大学科学教育研究センター長 向平和先生による3つのワークショップが開催され、参加者はそれぞれ熱心に学びを深めた。

凝縮されたプログラムを通して、特異な才能のある児童生徒を包摂する教育の方向性と実践の在り方を多角的に探す意義深い歴史的研究会イベントとなった。

実践レポート

米国視察レポート

「SCATS(The Summer Camp for Academically Talented Middle School Students)視察報告」

愛媛大学教育学部 立松 大祐 玉井 輝之

1. はじめに

今回、Julia Link Roberts博士の案内により、米国ケンタッキー州のウェスタン・ケンタッキー大学(WKU)が主催するサマーキャンプ「SCATS」を3日間視察する機会を得た(図1)。本稿では、その概要と現地で見えてきたことを報告する。



図1 SCATSの会場(WKU)とRoberts博士

2. SCATSとは

SCATSは「The Summer Camp for Academically Talented Middle School Students」の略称であり、WKU内に拠点を置くCenter for Gifted Studiesが45年以上にわたり運営してきた全米屈指のサマーキャンプである。

2026年度は6月7日から19日の2週間、6～8年生(日本の中学1～3年生相当)を対象に開催されました。例年、ケンタッキー州内にとどまらず全米・世界から約150名の生徒が参加するプログラムである。

SCATSへの参加には、学校の教師・カウンセラー・校長からの推薦に加え、ギフテッド認定、IQ125以上、あるいは標準学力テストで上位5～10パーセンタイルに相当するといった能力基準のいずれかを満たすことが求められる。

カリキュラムは毎年およそ24のクラスが用意される。「演技」「航空工学」「料理化学」「哲学」「ドラムと音楽制作」「スパイ・アカデミー」など、通常の学校では体験できない多彩な内容が並ぶ。生徒は毎日4コマの授業に出席する。授業はWKUの教員、地域の教師、そしてギフテッド教育を学ぶ大学院生が担当し、知識を一方向的に教える

のではなく、生徒が自ら考え、試し、創るハンズオン(実践的な体験)と体験を通じて科学に触れるマインズオン(思考を通じた理解)のアプローチが徹底されている。

3. 授業とランチミーティングの見学

6月8日から3日間、授業を見学した。2026年度の授業を表1に示す。

表1 2026年度のSCATSの授業一覧

	クラス名
1	Acting
2	Actually, it IS Rocket Science
3	Aviation
4	Clowning
5	Culinary Chemistry
7	Disease Detectives
8	Double Threat: Monologues
9	Dragonflies, Bubbles, Pine Cones & Ferns
10	Drumming and Rhythm Design Lab
11	Evolution of Popular American Music
12	Extreme Weather
13	The Facts Behind Fear
14	Geometry: Shapes That Come to Life
15	Interactive Storytelling (RPG)
16	Intro to Philosophy
17	Investigations in a Nutshell
18	Making Discoveries Through Artmaking
19	Pattern & Collage
20	Reaching New Heights (Architecture)
21	Real-World Math & Problem Solving
22	Russian Language
23	Spy Academy
24	Storytelling

見学ができた授業の一部とランチミーティングの様子について報告する。「Spy Academy」では、暗号化されたメッセージを解読してロッカーの番号を突き止める「ミッション」形式の課題が用意されており、生徒同士が協力しながらコードを解き明かしていく姿が印象的だった(図2)。



図2 「Spy Academy」の様子

音楽分野では、「Drumming and Rhythm Design Lab」を見学した。生徒たちはバケツを打楽器として用い、車座になり互いの演奏を聴き、リズムパターンを創作していた。教員はホワイトボードに「2つのフレーズ(8小節)」といった記譜を示し、生徒が考案したリズムや身体表現を共有していた。生徒の即興的な創作活動を音楽理論と結び付けながら振り返りを促す指導が行われ、創造性と理論理解を往還させる学習デザインが印象的であった(図3)。



図3 「Drumming and Rhythm Design Lab」の様子

自然科学と芸術を融合させた講座としては「Dragonflies, Bubbles, Pine Cones & Ferns」が挙げられる。紙を折りながらトンボの羽やシダの葉に見られる幾何学的な繰り返し模様を再現したり、シャボン玉を使った水彩アートを通して自然界に潜む数学的なパターンを探究したりする活動が行われていた。一見遊びのようにも見える活動の中に、数列や対称性といった数学的な概念への気づきが自然に組み込まれていた(図4)。

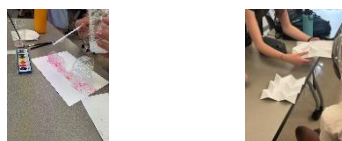


図4 「Dragonflies, Bubbles, Pine Cones & Ferns」の様子

月曜・水曜のランチタイムには、授業を担

当する教員や実習生が集まり、意見交換を行っている。各クラスで展開された特色ある活動の共有や、生徒対応に関する疑問点への助言などが行われており、授業の合間を活用してリアルタイムに学び合う場として機能していることがうかがえた(図5)。



図5 ランチミーティングの様子

4. 学びを支えるコミュニティの形成

印象的だったのは、生徒たちの目の輝きである。多くの生徒が授業に没頭し、仲間と議論を重ね、失敗を恐れずに実験や制作に取り組む姿がそこにあった。知識を教わるのではなく、ハンズオンとマインズオンのアプローチが中心となるような工夫がされ、生徒の独自の思考や創造性を最大限に引き出すことが目指されていた。

本プログラムは宿泊型キャンプであり、生徒は2週間、大学の学生寮で共同生活を送る。教室へのスマートフォンなどインターネット接続可能なデバイスの持ち込みは禁止され、寮でもそれらの使用に制限が設けられていた。このような環境により、生徒同士が対面でコミュニケーションを図る機会が自然に生まれるよう工夫されていた。

多様な活動を通じて「誰もが受け入れられ、学びが称賛されるコミュニティ」が育まれていた。生徒を見守るカウンセラーや指導者の多くはSCATSの参加経験者であり、充実した支援体制が整っていることも、このキャンプの大きな強みといえる。

5. おわりに

SCATSが45年以上にわたり継続してきた背景には、共同生活を通して「しっかり学ぶ」「自分がどういう人か理解し気が楽になる」「安心して家に帰る」という3つの理念の実現を目指していることがあると感じた。才能ある子供たちは、時に通常の学校で孤立しやすいといわれる。しかしSCATSでは、生徒たちは全米や世界から集まった仲間と切磋琢磨する中で自己肯定感を育み、自信をもって学びに取り組む姿が印象的であった。

実践レポート

インド視察レポート

「KGERC(Kaveri Gifted Education and Research Center)及びプネーの才能教育機関の視察報告」

愛媛大学教育学部附属特別支援学校 川本 孝

1. はじめに

2026年2月17日から19日まで、愛媛大学教育学部附属才能教育センター長の隅田学教授、サンジタ・プラサド特定研究員と共に、インドのプネーを訪問した。本稿では、その期間に訪問したKGERCと才能教育機関等の概要とその様子について報告する。

2. KGERCとは

カヴェリ・才能教育研究センター(KGERC)は、インド・プネーのカヴェリ・グループ・オブ・インスティテュート(KGI)に設置された、特異な才能ある子供たちの発見と育成を目的とする教育研究機関である。



KGERCの外観

設立から12年を迎え、子供、保護者、教師、カウンセラー、研究者を対象に、才能教育に関する啓発、研修、アセスメント、教材開発、研究を進めている。活動の中心には、高い知的能力や創造性を持つ子供が、知識を受け取るだけでなく、実験や探究を通して自らの可能性を伸ばしていくという考え方がある。KGERCは、STEM教育、数学的才能の育成、教師研修、保護者支援にも力を入れており、インドにおける才能教育の実践と研究を結び付ける重要な拠点となっている。

また、KGERCは才能ある子供を特別な存在として切り離すのではなく、心理的安定、学校生活、家庭との連携を含めて総合的に支える点に特徴がある。

カウンセリング部門や特別支援教育部門とも連携し、学習上の強みや困難を多面的に捉え、個に応じた支援につなげている。

3. 現地の学校の視察

2月17日、最初にKGERCを訪問し、施設概要の説明を受けた後、愛媛大学教育学部附属才能教育センターの取組を紹介した(写真2)。その後、隅田教授と別れ、私とサンジタ特定研究員とでカルマディ・シャマラオ小学校を訪問した(写真3)。同校はKGIによって設立された小学校で、インドの価値観に根差したグローバルシチズンの育成を目指している。校内には特別支援教育チームがあり、読み書き、綴り、理解、算数などに課題を抱える児童を支援している。視察では、学校概要、児童の実態、アセスメント、支援体制、教員間の協力、研修システムについて説明を受けた。

ここで、私が特に印象に残ったのは、特別支援教育チームが使用しているチェックシートである(図1)。注意、言語、読字、書字、算数、運動、社会性・情緒面など、多面的な項目で児童の困難さを把握し、支援につなげる仕組みが整えられていた。国や文化、言語、宗教が異なっても、子供一人一人の困難さを丁寧に捉え、強みと課題に応じて支援を組み立てる姿勢は、日本の特別支援教育と重なる。教育制度や環境は違っても、子供を中心に考える視点は共通していると実感した。



KGERCのスタッフとの情報交換会



カルマディ・シャマラオ小学校の視察

Checklist For Identifying Learning Disability (Grade1 - Grade4)

Name:

Class & Div:

CT:

SR. No	Rubric	Response
Attention		
1	Has difficulty sustaining attention in work tasks or play activities	
2	Does not follow through on instructions and fails to finish schoolwork, chores, or duties in the workplace	
3	Has difficulty organizing tasks and activities	
4	Avoids, dislikes, or is reluctant to engage in tasks that require sustained mental effort such as homework and organizing work tasks	
5	Loses things consistently that are necessary for tasks/activities (e.g., toys, school assignments, pencils, books, or tools)	
6	Is easily distracted by outside influences	
7	Is forgetful in daily/routine activities	
Other		
1	Confuses Left & Right	
2	Often loses things	
3	Is slow to learn new games and master puzzles	
4	Has difficulty listening and taking notes at the same time	
5	Performs inconsistently on tasks from one day to the next	
6	Has difficulty generalizing (applying) skills from one situation to another	
Gross & Fine Motor Skills		
1	Appears awkward and clumsy, dropping, spilling, or knocking things over	
2	Has limited success with games and activities that demand eye-hand coordination (e.g., piano lessons, basketball, baseball)	
3	Has trouble with buttons, hooks, snaps, zippers and trouble learning to tie shoes	
4	Creates art work that is immature for age	
5	Demonstrates poor ability to color or write within the lines	
6	Grasps pencil awkwardly, resulting in poor handwriting	
7	Experiences difficulty using small objects or items that demand precision (e.g., logos, puzzle pieces, tweezers, scissors)	
8	Dislikes and avoids writing and drawing tasks	

カルマディ・シャマラオ小学校の特別支援教育チームが使用しているアセスメントのためのチェックシート

午後はカルナータカ高等学校に移動し、特異な才能をもつ子供の保護者との面会を行い、子育てや将来、日本の教育について意見交換を行った。保護者が子供の可能性を大切にしたいと願う気持ちは、日本もインドも同じであると実感した。

その後、KGERC設立12周年記念イベントに参加し、隅田教授が「人間中心のSTEM教育」をテーマに約40分間の講演を行った。日本の科学教育やSTEAM教育の実践を紹介し、実験、創造性、探究心を重視する教育の意義を発信された。



保護者との会合

隅田教授の講演

2月18日には、ジュナナ・プラボディニ学校を訪問した。同校は1962年に設立された、知的才能のある生徒の育成に特化したインド初の学校として知られている。ここでは、主任の先生から学校の理念や教育課

程について説明を受けた後、中学2年生の女子生徒5名による自主研究のプレゼンテーションの発表を聴講した。中学生でありながら、自ら地域を調べ、国に対するアプローチを考えるという彼女たちの高い志、仲間との協調性、そして精度の高いプレゼンテーションには深い感銘を受けた。その後、異学年で構成される自由研究活動の授業を見学した。各グループでは、2~4人の児童生徒が協力し、自分たちで発案した発明道具を手作りし、実際に作動するか検証していた。課題を見付け、試作し、改善する過程が日常の学びに位置付いていることに、強く心を動かされた。



ジュナナ・プラボディニ学校



自由研究活動の見学

午後はKGERCに戻り、今後の学術交流、連携研究、KGERCと愛媛大学教育学部附属才能教育センターとの協定等について打合せを行った。今回の視察は単なる訪問にとどまらず、今後の共同研究や教育交流へとつながる具体的な出発点となった。

4. おわりに

今回のインド視察では、才能教育において先進的な実践を重ねているKGERCのスタッフと直接情報交換を行い、その理念と方法を学ぶことができた。新しく設置された愛媛大学教育学部附属才能教育センターにとって、KGERCの取組は今後の方向性を考える上で大きな示唆となった。また、カルマディ・シャマラオ小学校では、特別支援教育におけるアセスメントと支援の普遍性を確認し、ジュナナ・プラボディニ学校では、子供たちの高い学習意欲と社会に働きかけようとする姿勢に感動した。日本の子供たちも、自分の関心を深め、仲間と協働し、社会とつながりながら学ぶ経験を保障していく必要があると考える。今回の学びを、今後の才能教育及び特別支援教育の実践に生かしていきたい。

「選挙について書いた少女」

愛媛大学教育学部附属才能教育センター 特定研究員 Sanjita Prasad

【事例…小学5年生女儿の場合】

彼女が小学5年生のとき、母親がEUGATEに連絡をしてきた。最初のメッセージには、筆者がすぐに感じ取るようになったある種の感覚が滲んでいた。疲弊と困惑、そして解決への希望が入り混じった、独特の組み合わせである。「親の能力の限界がきてしまい」、「何年も探していました」と母親は書いてあった。

母親によれば、この子は生まれたときから、家族を戸惑わせるような独特さを持っていた。乳児期には感覚的な嗜好の偏りが顕著であり、食べ物や食感に非常に敏感で、音にも敏感だった。また、同年代の子供が好むような遊びにはほとんど興味を示さなかった。幼い頃にASDの診断を受けたが、母親を驚かせたのは、自分が知っているわが子が診断の特性と一致しないように見えたことだった。娘は社交的で、積極的で、物怖じをしない。同年代の友人よりも大学生と過ごすことを好んでいた。余暇には独自に調査を行い、記事を書いていた。最近書いた記事のテーマは、日本の総選挙だった。

娘の強みは具体的なものだった。複数の資料を読み込み、一つのレポートにまとめる力を持ち、物事に対してバランスよく論理的に取り組む姿勢があり、そして自己主導型の学びへの旺盛な意欲をもち合わせている。一方で、困難な面も同様に具体的だった。あらゆる繰り返しへの強い拒否反応があり、人混みでの音への敏感さもある。そして、自分の意見が理解されないグループ討論への参加の難しさがみられた。「いつも多対1になってしまい」、「意見を言うこと自体を諦めてしまい」と母親は書いてあった。

3年生まではどうにか学校に通えていたが、それ以降は耐えられなくなった。前述のとおり、娘は自己主導型の学びを好み、数学は独学で取り組み、理科のプログラムにも参加していた。しかし、彼女が持つ強い知的好奇心は、満たされていなかった。すでに一度で習得した内容を繰り返し、周囲と

同じペースで進むことを求められる教室は、新幹線に路面電車のレールを走らせようとするようなものだった。

相談の場で、筆者は母親が娘の最近の様子を語るのに耳を傾けた。話の流れのなかで、ほとんど何気なく、こんなことを耳にした。娘が、あるプログラムを通じて出会った理科の先生に、心から喜んで接しているというのだ。娘の興味を理解し、思考の質を評価し、適切に挑戦を与えることのできる先生だった。その先生は私立学校に所属しており、継続的に指導を受けるには入学試験に合格する必要があった。

筆者が母親に提案したのは、娘とオープンに話し合うことだった。具体的には、入学のプロセスについて率直に話し合い、最終的な決断は娘自身のものであること、家族は彼女の選択を支えるということを伝えることである。11歳の子供に決断させるのは早すぎると感じる大人もいるかもしれない。しかし、こうした子供たちは知的には年齢を超えた成熟を持ち、判断を下す力を十分に備えている。同時に、感情面ではまだ子供であることも忘れてはならない。

面談の終わりに、母親は「気持ちが悪くてもうええ感じがします。これからどうすればいいか、見えてきました」と話してくれた。相談者が連絡をくださるとき、その心には必ず希望がある。その希望をともに持ち続けられたとき、実践者としてこの仕事の意味を感じる。

この事例が示しているのは、問いを立て直すことで、見落とされがちな側面が見えてくるということである。この家族の不安は、「なぜ娘は学校に行かないのか」という一つの問いを中心に組み立てられていた。しかしこうした問いは、しばしば不完全な理解と的外れな対応につながる。実践者が問うべきより生産的な問いは、「彼女にはどのような学びの環境が必要か」ではないだろうか。

「キッズアカデミア ウィンタースクール2025実践報告(1)」

愛媛大学大学院教育学研究科 篠崎紀華・愛媛大学教育学部 隅田学

1. キッズアカデミア・ウィンタースクール 2025

キッズアカデミアは、愛媛大学教育学部隅田学教授が、高度な知的/創造的能力や高い意欲を示したり、特定の学問分野に長けていたりする幼い子供たちの個性や能力を見いだし、伸張する学習プログラムを開発・実践するために、2010年にスタートさせた特別教育プログラムである(Sumida, 2025)。本報では、2025年12月から2026年1月にかけて3回のシリーズとして実施されたキッズアカデミア「ウィンタースクール2025」(以後、ウィンタースクールとする)の実践を報告する。

今回のウィンタースクールは、テーマを「クリスMath」とし、特に算数・数学に関心の高い子供たちを募った。応募者には、事前に応募する子供に関する一般的な行動の特徴、算数・数学に関する行動特徴、学校の算数の授業での強みや困難の状況、授業の工夫や支援等、学校外での学習状況、検定等の受験歴や学習歴、参加に関する懸念事項について尋ねるとともに、事前課題を送り、それらへの回答を多面的・総合的に判断し、小学1年から4年までの8名(愛媛、広島、兵庫、東京、岩手県在住)を選考した。

ウィンタースクールは、オンライン(同期型)で全3回、各回2時間、実施した。プログラムの内容については、米国で著名な才能教育センターが開発した市販教材(Center for Gifted Education, 2020a, 2020b; Gavin et al., 2007)を参考に、参加者の子供用にアレンジして用意した。具体的には、ウィンタースクールの第1回は展開図の作成とお店の予算計算、第2回は倍数・素数探しと単位換算、第3回は庭のデザインや収益計算、算数オリンピックの問題を選んで挑戦した。事前課題の一つとして、参加者は事前に独自の算数問題を提出しており、その中から一部を選んで、参加者で解く活動も行なった。講座のインストラクターとしては、愛媛大学教育学部の学生2名を中

心に、大学教員1名と研究補助員と一緒に参加し、状況に応じてサポートしながら行なった。

2. 児童Aの事例

2.1. 事例となる児童について

本節では、小学2年生のA児を事例として紹介する。A児は、一般的な行動や算数・数学関わる行動特徴については全般的に才能傾向が高く、保護者からも強みは数字に強い、空間把握能力全体像を掴んで考えること、が指摘されていた。

日常会話の中から、遊ぶときにサッカーコートを描こうとしたとき、比率や因数分解のような考えを出したり、何かぼーっとしているように見えて、突然、数について突拍子もないことを聞いてきたりすることも保護者から報告された。算数の問題を作って出題することが好きで、年中児の時からノートに足し算引き算の問題を書いたりしていたことも報告があった。過集中のあまり時間の感覚がわからなくなることがあったり、正しいかどうかという点から思考しがちだったり、完璧主義な傾向が見られることも指摘されていた。

2.2. 算数課題について

今回紹介する事例は、ウィンタースクール第3回にて取り上げた課題の一つ、「庭のデザインや収益計算」である。その課題では、児童が建築士の役割を担い、与えられた予算や労働条件の枠組みの中で、特定の面積を持つ「オリジナルの庭」をデザインする。そして、建築に必要な費用を求めたり、条件に合わせて従業員の人数や労働時間を調整したりする必要がある。この課題は、多面的な思考が求められるとともに、自由度が高く、かつ複数の単位変換($1\text{m}=100\text{cm}$ 、 $1\text{m}^2=10,000\text{cm}^2$)と複雑な計算を必要とする特徴がある。

2.3. ウィンタースクールでのA児の実態

課題を解き始めた直後、多くの他の児童が感覚的・デザイン先行で庭の形を決め始める中、A児はスタート段階で手が止まって

いた。その時のA児とインストラクター(講師と示す)とのやりとりを以下に示す。

A児:「まだ一番も終わってない」

講師:「どんな形にしたいと思った?好きな形にしていいいんだよ」

A児:「まだそこがわかんない」

A児:「数字で広さをやろうとしているから」「これは形を考えただけでいいんですか?」

講師:「面積を143㎡にしなければならぬからね」

A児は「143

㎡」という数字に強い思

いがあった

ことから、逆

に自分が課

題の何から

行うべきか

全体像を考

える前に、解

決の一步を

踏み出せない状態に陥っていた。活動開始

から34分が経過しても、インストラクターの

問いかけに対して「まだきまってない」と答

えていた。

本来、複雑で緻密な思考や計算ができる

児童であっても、独自の思考の様式やこだ

わりから、手が動かない状態となっているこ

とがある。そこで講師は「計算で143㎡にし

ようとしてくれてるんだよね?」とA児の思

考のプロセスを価値づけた上で、「143㎡を

ちょっとずつつめるのはどうかな?」という

スモールステップの提案を行なった。そうし

たところ、A児は「やってみる」と応じ、自ら

のペースで課題に取り組み始めた。

開始から51分が経過したところで、A児

は「(1)できました」と自力で庭のデザインを

完成させた。そして、庭のデザインに必要な

費用についても求めることができた。結果

の発表場面では、自ら大きく真っ直ぐに手

を挙げ、「572,000円」と嬉しそうな表情

で自分の考えを発表した。

2.4. 保護者への事後アンケートより

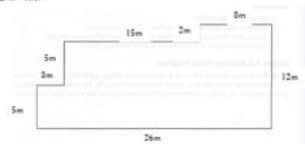
計3回のプログラム終了後、各参加者の

保護者にアンケートの回答を依頼した。その

質問項目「ウィンタースクールに参加して良

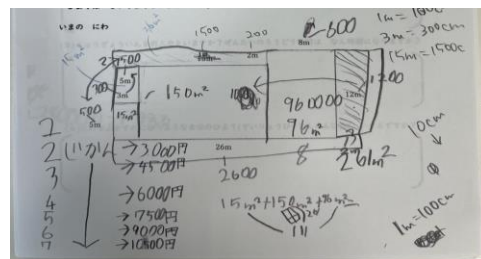
かったと思うこと、家庭での取り組みの様子

チャレンジ! すてきな けんちくしに なろう!!!
あなたに けんちくし ですよ。
いまの けんちくし の ようばうにあった にわを デザイン しよう。
～もももんの ようばう～
・タイルを つかう。
タイル1: 10cm × 10cm 50 円
タイル2: 50cm × 50cm 1,000 円
・いまの にわから 143㎡ おおきくする。
・3週間以内に かんせいさせる。
(10 日以内に かんせいした ばあいには ボーナス 20,000 円)
・もし 143㎡ が 800,000 円以内に なるようにする。
～かいしゃの じょうけん～
・しごとが できるのは げつよう日から きんよう日のみ。
・せきようは 120 時間以内 しか かわる。
・ほうりつによって じゅうぎょういんは 1 日 8 時間しか ほかることが できない。
・ひようは せいりようひやじんけんひ(一人につき 1 時間 1,500 円)
いまの にわ



ワークシート

等」への回答において、A児の保護者から、第3回の「庭のデザインや収益計算」の課題への挑戦が、A児の内面にこれまでにない肯定的な変化をもたらしたことが報告されていた。以下その引用である。



A児の解答の一部

「数への興味は強いものの、家で先取学習のようなものをしていただけではなかった。問題自体は難しく感じたようです。しかし、家で公式や必要な考え方をスクール講座中に教えるとよし!!とすぐに理解して取り入れ、問題に食らいついている姿勢がうかがえ、驚きました。というのも、普段はつまりず事があったり、一人だけお友達についていけず混乱したりすると立ち直れなかったり、すぐにあきらめたりするからです。最後まで遅れてもあきらめずに取り組めたのははじめてで、親の私も感動して泣きそうになってしまいました。

最後まで脳みそがプシューとなっても解き終えたときスッキリー!!!おわったー!!!というような達成感のある顔をしていました。あの子が言っていたこれは何?というようななかんじで、お友達のようにもっと知識を持ちたい、早く解けるようになりたい、と思っているようです。」

引用文献

Center for Gifted Education. (2020a). *Math curriculum for gifted students: Lessons, activities, and extensions for gifted and advanced learners: Grade 3*. Prufrock Press.

Center for Gifted Education. (2020b). *Math curriculum for gifted students: Lessons, activities, and extensions for gifted and advanced learners: Grade 4*. Prufrock Press.

Gavin, M. K., Dailey, J., Chapin, S. H., & Sheffield, L. J. (2007). *Getting into shapes: Student mathematician's journal - Level 4*. Kendall/Hunt Publishing Company.

Sumida, M. (2015). Kids Science Academy: Talent development in STEM from the early childhood years. In Khine, M. S. (Ed.) *Science education in East Asia: Pedagogical innovations and research-informed practices* (pp. 269-295). Springer.

「キッズアカデミア ウィンタースクール2025実践報告(2)」

愛媛大学大学院教育学研究科 篠崎来実・愛媛大学教育学部 隅田学

1. キッズアカデミア・ウィンタースクール2025

本実践は、算数・数学に高い関心をもつ児童を対象としたウィンタースクール2025として実施した。参加者は事前の選考を経て選出された小学1年生3名、2年生2名、4年生3名の計8名であり、全3回をオンライン形式で行った。各回の活動時間は2時間とし、米国で受賞歴のある数学教育教材などを活用し、日本語で学習活動を行った。

活動内容としては、第1回に展開図とお店の予算計算、第2回に倍数・素数探しや単位換算、第3回に庭のデザインによる収益計算と算数オリンピック問題への挑戦を行った。

2. 結果

2.1. 分析の対象

本稿では、児童A(小学4年)と児童B(小学2年)の学習過程を取り上げた。それぞれの児童に関する事前アンケートの一部を以下に抜粋する。

児童A:【現在中学3年生レベルまで数学は習得済みであり、高校もやりたがりますが、私が教えきれなくなってきたので、参考書だけわたして気になるところをたまにしている。学校では算数を教える役割を与えられている。】

児童B:【学校で算数の新しい単元を学習した際、仕組みや構造に興味を考えることに強い関心を示している。自分なりに法則を見つけることを楽しんでいる様子がある。一方で、問題文を丁寧に読み切ることや、条件をすべて使い切ることに課題があり、初見の文章では思い込みで進んでしまう。反復的な計算練習やスピードを求める活動では集中が続きにくい。】

2.2. 児童Aの事例から:多様な考えが許容される環境

児童Aは、活動を通して、問題に対して多面的に考える姿が見られた。

例えば、第3回の活動で建築士として収益換算を行う際には、

児童A:「従業員に払う金額と材料費は合わせて80万円以内ということですか？」

講師:「そういうことだよ。それを少しでも浮かせると建築士の利益になるよ。」

児童A:「3週間以内に完成って書いてるけど、作業にかかる時間が120時間以上だったら、ちょうど3週間で終わるよ。120時間って示した方がいいんじゃないかな。」

講師:「それは150時間にしてもいいんだよ。120時間以上だから。」

児童Aは、当然従業員の作業時間が最も短く完成出来る、120時間しか選択しないだろうと想定していたため、講師の返答に対して、まだ疑問が残る表情であった。

また、「作業は120時間以上かかる。」という問題文があり、「全体時間は何時間かかりますか」という問いに対し、

児童A:「全体の労働時間は何時間かかりますかっていう問題があるんですけど、作業は120時間以上かかるっていう説明と似てませんか？」

講師「全体の労働時間は120時間以上で、何時間働いたのかわかることを知りたいから、1人じゃなくて全体でだよ。」

児童A:「全体! ?あ、ああそういうことか割り切れなかった場合を考えてなのか。あと増やすこともあるってことですね。」

児童Aは自身の疑問をその場で教師に質問し納得したうえで、問題に対して全力で取り組んでいた。

児童Aは、教師が準備していた解法や、他児童の考えに対しても素直に驚きや賞賛を示していた。多様な考え方を受容する姿勢が育まれていたことがうかがえた。

2.3. 児童Bの事例から:多様性を認めつつ核となる部分は確認する

児童Bは、プロジェクト冒頭で行った「おにがしまに向かう仲間を選ぼう。」という活動の際、島のサイズや天候など細かい点まで質問し、最適な仲間を選択するユニークな思考を行っていた。また、自分の考えを

積極的に発信する姿が特徴的であった。

一方で、小学2年生であり、保護者の方の事前情報にもあったように、問題文の語句や条件を理解できず、言葉の意味を確認する場面が見られた。

例えば、第3回では、「 143m^2 の庭を追加で作成したい。」という問題文に対し、

児童B:「 143m^2 以上でもいいですか?」と問題の意図から離れた質問をした。講師が「持ち主は 143m^2 がいいって言うてるからそれでいいか。」と言葉掛けを行うことで、児童Bは依頼主から依頼されていることを再認識し、納得した様子であった。

2.4. 児童Aと児童Bの対話事例から:社会心理的成長にもつながる学びの促進

第1回のお店の費用計算問題では、途中に結合法則を活用して、品物が同じである場合、購入する順番が異なっても金額が同じになるという証明を行った。その際に、

講師:「掛け算と足し算はそれぞれ結合法則が成り立つけど混ざったらどう?」

児童B:「あ、混ざった場合も混ざった場合も使えますね。」

児童A:「例えば $1+2\times 3$ と、 $(1+2)\times 3$ 、じゃあ順番違うじゃないですか。あ、あの、あの、計算する順番というか、逆に違ったりするので、そういうあの場合とかは、あの。答えが変わってくるっていうか、わかる?」

両者がお互いの考え方の差異を理解できず、困惑した状況であったため、

講師:「両方あってる。両方あってるよ。だから、掛け算になってしまえば大丈夫なんだけど、足し算と掛け算が括弧無しで混ざっていると結合法則は成り立たないってことね。順番とかがね、変わってくるから」

と、両者の考え方を認めた上で、違いをまとめた。その結果、

児童B「そっかじゃあ掛け算以外の足し算が全部に括弧がついていたら同じになるんだね。」

と自身の言葉で説明、修正することができていた。これは単に正解を教わったのではなく、異なる考え方との出会い、吟味を通して自分の理解を深めることができた場面と捉えられる。

さらに注目すべき点として、活動当初は自分の意見を発信することが中心であった児童Bが、後の活動では「児童Aも手を挙げていたよ」と発言し、自らも発表したい気持ちをもちながら児童Aの意見を優先する姿が見られた。これまでの活動を通して児童Aの考えが自分には思いつかない面白さや価値をもつことに気付き、「他者の考えを聞くこと」に意味を見いだしたと考えられる。

3. 保護者の方からのコメント

プログラム終了後には、保護者にアンケートへの回答を依頼した。児童Aと児童Bに関する回答の一部を以下に引用する。

児童Aの保護者:「問いと答えが1対1になりがちな算数において、いろいろな考え方や解き方があるということ、そしてそれを共有するという経験ができ、良かったと思いました。また、それを通して自身の考えを説明する、伝えようという場面が多かったように感じます。児童Aはその力が弱いのでうまく伝えられない場面もあったかと思いますが、回を重ねるごとに少しでもよくなったかなと感じました。」

児童Bの保護者:「児童Bは終始興奮気味で発見があるたびに「あ! わかった」と声に出して楽しんでいました。私は数学の助言をほぼできないため、授業内で理解状況に応じたコメントをいただけた点が特に有益でした。」

保護者であっても才能のある子供に対するアプローチは不安や手探りの部分が多い。講師による言葉かけや、他者と関わる場面に応じて、子供たちは興味を持ち、呼応するようになったと思われる。保護者は活動を通して、子供たちの学習面だけではなく、自身の考えを上手く言葉にして伝えられる瞬間など、社会心理的な成長に気づいていた。多様な子供たちの特性や能力に応じた教師の柔軟な対応が重要であろう。

トピックス

報告：愛媛大学教育学部附属才能教育センター 特定研究員 森本久美

1. 才能教育支援基金創設

才能教育センターの取組に賛同いただいた一般の方からのご寄付の申し出があったことから、2026年5月27日、「愛媛大学才能教育支援基金」が新設されました。

本基金は、子供たちの置かれた環境や背景にかかわらず、多様な才能が見過されることなく育まれるよう、その成長を切れ目なく支援する教育の拡充に活用します。全ての人の可能性が社会とつながり、それぞれの個性や強みが響き合う共生社会の実現に向けて、皆様からのご支援を大切に活用させていただきます。



才能教育支援基金

2. ポッドキャスト Gifted Talk Japan

2026年3月10日を「サイノウの日」としてポッドキャスト「才能・トーク・ジャパン」の放送を開始しました。才能や才能教育をめぐる素朴な疑問を、やさしく、丁寧に考えていきます。才能は学校の成績や目立つ成果だけに表れるものではなく、繊細さや葛藤、周囲には見えにくい困難とともに現れることもあります。

第1回では、Gifted Talk Japanが大切にする視点を伝えるとともに、具体的な生の声にも耳を傾けながら、これからの対話の土台となる考え方を静かにひらいていきました。多様な才能に耳を澄ますことから、才能への理解と教育の文化を少しずつ育ていく第一歩となる放送でした。

第2回では、才能のある子供にしばしば見られる「強いこだわり」、第3回では、才能のある子供が通常授業の中で感じる「繰り返し学ぶこと」への違和感を取り上げました。今後もタイムリーな話題を届け



Gifted Talk Japan

3. 日本才能研究学会の設立

2026年3月10日に「日本才能研究学会(JSGS)」が、松村暢隆教授(関西大学名誉教授・愛媛大学教育学部附属才能教育センター客員教授)を会長として設立され、力強い歩みを始めました。本学会は、いわゆる「ギフテッド支援」という限定的な枠組みにとどまらず、才能教育・才能伸長に関連する多岐にわたる学術分野から、基礎的・応用的知見を包括的に結集することを目指しています。才能のある児童生徒を含む全ての子供たちが、適切な環境のもとで自らの持つ力を存分に伸ばして発揮できるような、教育と社会の在り方をここから構想していくものです。

来る2026年9月26日・27日、記念すべき第1回年次研究大会が、愛媛大学才能教育センター(EU-GATE)を擁する松山の地(松山市立子規記念博物館・愛媛大学 E.U. Regional Commons)で開催されます。

本大会のテーマとして、「才能を研究し、才能を支える—日本における才能研究と教育実践の新たな地平—」を掲げ、多様な知見が交差するプログラムを通じて、会員相互の交流と学術的議論の深化を図ります。日本才能研究学会



4. 文部科学省WG

文部科学省では、現在の学校教育の中で、主体的に学びに向き合っていない子供の増加を受けて、多様な子供たちを包摂する柔軟な教育課程の在り方を検討しています。

初等中等教育局教育課程企画室栗山室長が中心となり、隅田学教授を主査としたWGが定期的に開催されています。特定分野における特異な才能のある児童生徒の教育課程に関する現状と課題、可能な支援等についての議論はいよいよ大詰めを迎えています。



文部科学省WG

愛媛大学教育学部附属才能教育センターニュースレター Vol.1 2026年9月1日発行

発行：教育学部附属才能教育センター

編集：教育学部附属才能教育センター 武市弘通

〒790-8577 愛媛県松山市文京町3番 TEL 089-927-9503

WEBサイト <https://eu-gate.jp/>